

プロローグ / After Dark

私の行先表示板に馬券とともに訳のわからない文言を記した紙が挟まっていることをご存じの方もいるだろう。あれは私の身の回りの出来事や気持ちを表す言葉を書き記しているもので、好きな歌の詞の一節を使うことが多い。ところで先週から私の机にMacintosh Power Bookがしばらく置かれることになった。そこでさっそくAfter Darkで行先表示板と同様の言葉を表示するようにしておいた。使ったのは山本正之さんの歌の一節「馬券 柴犬 ワンと吠える!」。特に深い意味があるわけではない。ただ週末に競馬に行くから、それにひっかけりそうな歌詞を単純に選んだだけである。

出発の前日になって、週末の天気が悪くなるという話が聞こえてきた。傘を持って行かないと困るかもしれないと思い、忘れないようにAfter Darkのメッセージを山本正之さんの別の歌の一節「あしたは雨が降るから 傘を用意しましょう」に変えた。ところがこの一節に続くフレーズが実は「あさっては雪が降るから...」。思えばこれが今回のツアーの行く末を暗示していたのかもしれない。しかしこの段階では雨が降ると嫌だな、という程度にしか考えていなかった。むしろそれとは別の不安が私の体の中で現実のものとなりつつあり、そのときの私にはそちらの方がずっと大きな問題であった。

第1話 / 長い夜

出発の前日、私はちょっとした酒席に顔を出すことになっていた。もととお酒は好きな方だが、少し前に酔って記憶をなくしたこと、前の週に生牡蠣にあたって体調を悪くしたことがあって、この日はかなり抑え気味に飲んだつもりだった。ところが酔いの回りが妙に速い。ここで無理は禁物と考えて、9時には皆と別れて寮に戻った。

寮に帰った私は、阪神に向かう準備をして床に入った。やがて眠りについたものの、再び目がさめるまで時間はかからなかった。からだじゅうががゆくて仕方がなかったからだ。見ると全身にじんましんが

出ている。こういうときはからだをかいては良くないと聞いているが、とてもがまんできるものではない。ひとしきりからだをかいては横になり、がまんできなくなるとまた起き上がることを繰り返していた。ようやく浅い眠りに入ったのは朝が近づいてからのことだった。そして私はその眠りから予期せぬ形で目覚めることになる。

第2話 / モーニングコール

トゥルルルル。一時の眠りを覚ましたのは電話の音だった。3つ目のベルが鳴り終わったところで、私は布団から手を伸ばして受話器を取った。「はい、東です。」「もしもし...」。電話の声は和泉さんだった。このとき、ひょっとすると和泉さんはツアーに参加できなくなったと言っているのではないか、という嫌な予感が頭をよぎった。その予感は半ば当たり、半ばはずれた。和泉さんは予定の電車に乗ることができないので、一人で遅れて行くことを私に告げて電話を切った。

このあと顔を洗って服を着替えると、時計はすでに8時25分を回っていた。深谷さんのところの車が知多寮に8時30分に来てくれることになっていたの、あわててバッグを担いで階段を駆け降りて玄関に向かった。するとすでに車が待っていた。急いで乗り込むと、今度は衣浦寮で斉藤さんを乗せ、名鉄の武豊駅へと向かった。こうしてメンバーの予定や自分のからだに不安を抱えながらもツアーは動き出したのである。

第3話 / 名鉄特急

武豊駅に着いた私たちは、8時54分発の特急に乗って名古屋に向かった。私が知多に来た頃は座席指定券の必要な特急を利用することはほとんどなかったが、最近はむしろ急行に乗る機会の方が少ない。深谷さんはそれは年をとった証拠だという。深谷さん自身、今は特急が出た直後であっても30分待つて次の特急に乗るそうだ。そう考える

ようになる過程はやはり大きな人生の転機である、と深谷さんはしみじみ語る。

私たちが乗った列車は、私がふだんからよく利用しているものだ。これに乗ると9時30分頃にWINSに着く。馬券の発売は9時からだが、発売開始直後は結構混雑する。それが一段落するのがちょうど9時30分なのである。

ただ私はこの列車に武豊ではなく南成岩から乗ることが多い。というのも金山までの料金が両者のあいだで60円違うからである。310円余分に払って特急に乗る者が60円を惜しむというのも妙な話かもしれないが、私の感覚だとこの60円の方がずっともったいないと感じるのである。そんなことを考えているあいだに、私たちを乗せた列車は名古屋に着いてしまった。

第4話 / 集合

名古屋に着いた私たちはすぐに近鉄の方へと向かった。最初は改札前で待ち合わせの予定であったが、かなり混雑していたし、車内で飲み食いするものを早く買っておきたいということで、早々とプラットフォームの方へ入っていった。

とりあえず売店でちくわのたぐいとゆで卵、それにおにぎりやビールを買う。そして小木曾さんか山本君は来ていないかと辺りを見回していると、深谷さんが小木曾さんらしい人を見つけたという。しかしよく見ると、それはただ頭の薄い知らないおじさんだった。今度はその近くの毛糸の帽子をかぶり、チェック柄のバッグをさげた、東北辺りからの出稼ぎ労働者風の人が目に止まった。名古屋にもそういう人がたくさん出てきているのかなど考えていると、その人がなぜかこちらに近づいてきた。一体何事だろうかと思ってみると、それがほかならぬ小木曾さんだった。

小木曾さんと合流した私たちは、売店でコーヒーにお茶、そしてカメラを買い足して電車へと乗り込んだ。やがて山本君もやって来て、

一応のメンバーがそろった。あとは電車が動きだすのを待つばかりとなった。

第5話 / 闖入者

名古屋から大阪へは近鉄アーバンライナーを利用する。切符の方は一週間前に購入しているのだが、6人の席をまとめてとることができず、3人・3人に分かれてすわることになった。深谷さん、小木曾さん、そして私が車両の最前列にすわった。ここは人が通るたびに通路のドアが開くのでどうも落ち着かない。まあ前が壁になっているから、2時間静かに面壁していれば達磨さんのように何か悟れるかもしれない、などとくだらないことを考えていたら、斎藤さんがやってきて一人に2本ずつのビールを置いていった。やはり私のような煩惱多き凡人に悟りは無理のようで、すぐにビールを飲み始めてしまった。

ビールが行きわたると、今度は私が食べ物を車両の中ほどにすわる斎藤さんと山本君に渡しに行った。すると本来和泉さんがすわるはずだった斎藤さんと山本君のあいだの席に見知らぬ男がすわり、斎藤さんと何やら問答している。どうやらその男は指定券なしで乗り込んできてたまたま空いていた和泉さんの席にすわろうとしているらしい。そこで隣にいた斎藤さんにその席にすわってよいか尋ねている様子なのだが、斎藤さんにしてみればそんなこと聞かれても困るといった具合でちががきそうにない。とりあえず私は二人に食べ物を配ってその場を離れた。

あとで聞くと、結局その男の無理が通ったらしい。別にこのことですわれない人が出たわけではないが、その強引さに多少の後味の悪さを感じつつ、電車は大阪へと向うのであった。

第6話 / 赤い顔

自分の席にもどった私は、ちくわをかじり、ビールを飲みながら、小木曾さん・深谷さんと雑談を交わしていた。ところが前日同様、アル

コールのまわりが馬鹿に早い。ビールを1本空けたところで顔がずいぶん赤くなっているであろうことが自分でもわかる。深谷さんには一人で飲んだような顔をしていると笑われた。もともとアルコールが入ればすぐ顔に出る方なのだが、それでもこの日の変わりようは尋常ではなかった。昨夜からのじんましの影響だろうか。

顔に出るといって、私は感情が表に出やすいことが悩みの一つとなっている。自分自身でも些細なこととわかっていることにすら、表情は過剰に反応して顔が赤くなったり青くなったり、自らの意志ではどうすることもできない。いつもの私のしまりのない笑い顔は、おそらくそうした表情の変化を隠そうとしてできあがったものだと思うのだが、どうも役に立っているとはいえないようだ。

それはともかくとして、昼間から顔を赤くして街中を歩くのも格好の良いものではない。大阪に着くまで何とか元にもどってほしいと思うのだが、こういうときほど時間の経過が早く感じる。やがて難波到着を告げるアナウンスがあり、ほどなく電車は終点の難波駅プラットフォームへと滑り込んだ。

第7話 / 落胆

私たちが大阪に着いたのはちょうどお昼過ぎだった。すでに電車の中で、大阪に着いたらそのあたりで有名な金龍ラーメンが自由軒のカレーを食べようと決めていたので、駅を出るとさっそくそれらの店があるという方向に歩き始めた。もっとも難波周辺をよく知っている者がいるわけではなく、多少の心当たりがあるという斎藤さんと山本君が大体の方角に残りの3人を先導するような形で進んでいった。こんないい加減な捜し方でわかるのだろうかという不安とは裏腹に、いともあっさり金龍ラーメンの看板が見つかった。

そこでお昼はラーメンの方を食べようということになり、店の方に向かった。案の定というか何というか小汚い店であったが、客はそこそこ入っている。かといって列を作って待たなければならないほどでもなかった。5人はそのまま店の中に入っていった。店内はカウン

ターがあるだけで、客はそこに出されたラーメンを立って食べる。カウンターにはキムチが山のように置いてあって、それはいくら取っても良いらしい。

その界限で有名だというラーメンの味はどんなものかと期待しながら待っていると、ほどなく私の目の前にもラーメンが置かれた。わくわくする気持ちをおさえながら一口食べたのだが、なんと拍子抜けする味だった。特においしいというわけでもなく、またこれという特徴があるわけでもない平凡なラーメンなのである。回りを見てみるとどうやらみんな同じことを思っているらしい。私たちは黙々とラーメンを食べ、そそくさと店を出た。そして誰からともなく私を感じたのと同じ落胆の思いをお互いに語り合った。

一体なにゆえにこの程度のラーメンが有名になったのか。店を出たときに私たちが抱いた疑問は、その周辺を歩くうちにやがて解けていくことになる。

第8話 / 質と量

昼食にラーメンを選択したことに幾ばくかの後悔の念を抱きながら、私たちは道頓堀周辺を歩くことにした。話に聞いていた「かに道楽」のかにや「くだおれ」の人形などをながめてまわったわけだが、そのさまは周りから見ればおのぼりさんのようであったろう。とくに記念写真をとるためにカメラを構える小木曾さんの姿は、あまりにもあまりすぎていてほほえましくさえあった。

さてそうやって歩いていくうちにやたらと目についたのが「金龍ラーメン」の看板である。ひとつ角を曲がるたびにその看板が目止まりといった具合で、そこそこに氾濫している状態なのだ。これだけあちこちに店を出しているのだから、私たちがあっけないほど簡単に金龍ラーメンの一店にたどりつけたのも無理はない。私たちが食べたところ以外の「金龍ラーメン」を最初に見つけたとき、ひょっとするとこちらが本店で我々が食べたのは味の落ちる支店だったのではないか、いやいや実は「金龍ラーメン」に見せかけた「全龍ラーメン」とかいう

まがいものだったのかもしれない、などと話していたが、そんな冗談を言っているうちは良かった。次から次へと出てくる「金龍ラーメン」の文字を見るたびに興がさめていくのを私たちはどうすることもできなかった。

結局、金龍ラーメンが有名なのは、その味ではなく店舗の数ゆえなのだろう。売り物の質よりも店舗展開などのマーケティングの優劣が成否を分けるという現代資本主義社会のひずみを身をもって感じたという意味では、貴重な体験だったかもしれない。

第9話 / 新世界へ

宿に向かうまで何をして過ごすかしばらく思案した後、せっかくだから吉本新喜劇を見に行こうということになった。相変わらず大体の方角に歩く私たちだったが、運良くとくに迷うこともなくランド花月にたどりついた。そこで公演時間を確認すると、昼の公演があと30分ほどで始まるらしい。これは良いタイミングだと思ったのだが、公演の内容を確認するとお昼は漫才とコントのたぐいだけで、肝心の新喜劇はやっていないことがわかった。そこでもう一度どうするかを話し合った結果、吉本はまた次の機会に譲るとして、ほかの場所に行くことにした。

私たちが次の目的地に選んだのは通天閣だった。初めて行く通天閣への期待が大きかったためか、このときの深谷さんのそぶりの微妙な変化に気がつく者はいなかった。私たちはすでに飽きるほど見てきた「金龍ラーメン」の看板のそばの入り口から地下鉄の駅に入り天王寺へと向かった。そして難波から2駅、動物園前で下車し、通天閣の場所を探した。探すといっても通天閣自体が巨大なランドマークであるから、いやでも目に止まる。通天閣が見える方向へと5人はぞろぞろと歩きはじめた。

地下鉄の駅から通天閣あたりを新世界というらしい。以前この「優勝通信」でマチカネの馬の名前を紹介したとき、マチカネシンセカイという馬がいたことを覚えているだろうか。あのときはクラシック音

楽シリーズということで、ドボルザークの交響曲に由来するとしていたが、馬主さんは大阪の人だし、本当の由来は案外こちらの新世界だったのかもしれない。いくつかの角を曲がると、目の前に通天閣がそびえ立っていた。通天閣の入り口を入ると「2階」へのエレベータがあった。ずいぶんたくさんの方が待っていたので、私たちはすぐ脇にあった階段を登ろうとしたのだが、そのとき私たちを呼び止める声があった。

第10話 / 「2階」

「もしもし」。声のする方に振り向くと、エレベータ待ちの人を整理する係とおぼしき人が私たちに話しかけてきた。「2階まで階段では遠いですからエレベータをご利用ください」「2階が遠い」とはどういう意味か解しかねたが、とくに急がなければならない理由もなかったのでエレベータを待つことにした。

待っている人が多かったのも、次のエレベータには乗れないかもしれないと思っていたが、エレベータには意外と多くの方が乗れ、5人全員があっさり次のエレベータに乗ることができた。エレベータは見るからに古く、しかし頑丈そうなひと昔もふた昔も前のタイプで、その重そうな見かけ通りゆっくりと上昇していった。そのためであろうか、「2階」までの到着の時間がずいぶん長く感じられた。

やがてエレベータが「2階」に着き、私たちがエレベータを降りて周囲を見渡したとき、係の人がエレベータを使うように言ったこと、「2階」に到着するまで時間がかかったことへの疑問は氷解した。通天閣の「2階」は付近の雑居ビルをはるかに見おろす高さにあったのだ。確かに入口からここまで何があるわけではないから「2階」といえば「2階」なのだろうが、もう少し呼びようがあるだろうに、とこれには苦笑するほかなかった。

ここからさらに上にある展望台にはお金を払わなければいけないらしい。そこで私たちは入場券の売り場にできた列の後ろに並ぼうとした。そのときかすかにうずった声私たちを呼び止めた。

第11話 / 攻防

「ちょっと...」。見ると声の主は深谷さんだった。「俺はここにいるから...」。すると間髪入れず小木曾さんが尋ねる。「あれ、深谷さん、高いところ駄目なの?」「いや、そういうわけじゃないんだけど...」。深谷さんは平静を装うが、いかんせん声のトーンも表情もいつもと違う。相手の弱点を握った喜びを隠しきれないといった感じの笑顔で小木曾さんは続ける。「深谷さん、高いところ駄目なの。ほんとうに高いところが駄目なんじゃあ、上にのぼらん方がいいかもしれんねえ」。自らの優位をかみしめるかのような口調だ。

「いや、高いところは別にかまわないんだけどね...」。深谷さんはなおも抵抗を試みる。しかしこの場での小木曾さんの優位は誰の目にも明らかだ。だがそこは深谷さんも承知のこと。小木曾さんにそれ以上の追撃の暇をあたえず、「じゃあ、俺はそこでオリンピックでも見てるから」と言い残して、その場を離れてしまった。そのすばやさにあっけにとられる私たちを背に、深谷さんは自動販売機でジュースを買い、「2階」の中央に置いてあるテレビの前にすわってしまった。ここであわてた素振りを見せては負けとばかりに、ことさらゆっくりとした動きで。

人生の先輩たる二人のこの攻防を前にして、斎藤さん、山本君、そして私の三人は、何もすることができなかった。相手の弱点を見るや攻撃をたたみかける小木曾さん。そしてそれをきわどくかわす深谷さん。両者の息づまる駆け引きは我々三人に、まだ人生に学ぶべきことが多いことを感じさせた。

第12話 / 模型

結局、深谷さんを残して4人が展望台までのぼることにした。料金500円を払うと、係の人がパンフレットをくれた。ただしなぜか二人に一部だ。通天閣の説明でもしてあるかと中を開いてみると、切り取って組み立てると通天閣の模型ができるというとぼけた代物だった。

こんなものを喜ぶ者などいやしないと山本君と笑いあっていたら、後ろの親子とおぼしき二人づれの会話が聞こえてきた。お父さんが小さな子供にそのパンフレットを見せてさかんに、こう作れば通天閣ができるんだよ、などと説明している様子。でも子供の方は乗り気でないのか生返事を返すだけ。それはそうだろう。子供だましというのが子供に失礼なくらいちやちなつくりなのだから。

自分にとっておもしろくないものでも子供だったら喜ぶなどと考え出すのはいつからだろうか。後ろの親子のやりとりを聞きながら、この思い上がりは自分自身にも思いあたるところがないではないと自戒する私であった。そうするうちに展望台にのぼるエレベータがやってきて、私たちはその中へと乗り込んだ。

第13話 / 展望台

展望台へのエレベータもずいぶん時代を感じさせるものだった。外の風景を見ることができ、それにあわせてテープレコーダから説明が流れるというエレベータは、できた当初は画期的なものだったのだろう。だが今となっては眺望の狭さや音の悪さが目立つばかりで、おそらく景色を楽しむために設定したと思われるゆっくりとした上昇の速度はいたずらに乗客の気分をいらだたせるばかりであった。基本的な機能を軽視して作られたものは、技術の進歩とともに醜悪な姿をさらすことになる。

展望台は思った以上に狭く、人の多さとあいまってかなりの窮屈さを感じる。見晴らしは悪くはないが、さりとて驚くほどのものではない。こういう場ではおなじみの有料の望遠鏡、通天閣を説明する色褪せたパネル、どこの観光地に行っても同じものが置いてあるみやげもの屋などを一通り目にして退屈するまでに大した時間はかからなかった。売店でジュースを買った斎藤さんは店の女の子がかわいかったと喜んでいたが。

そんなわけで展望台には長居することもなく、再び「2階」へと降りることにした。上があの程度のものなら深谷さんの選択は正解だった。

たかもしれない。ただ深谷さんが下に残ってしてくれたおかげで、私たちもこの後に少しばかり愉快的な光景を目にすることができた。

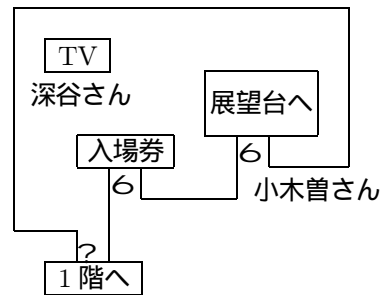
第14話 / 拙速

「2階」に着いてエレベータを降りると、目の前に「お帰りの方は左側にまわってください」と書いた案内板があった。左側というと来たときとは逆の方向だから、そのまま行くと「2階」に残っている深谷さんとはぐれてしまわないだろうか。私の頭の中をそんな不安がよぎった。でも1階と「2階」を結ぶエレベータはひとつしかなかったはずだから...、とさらに考えをめぐらせているあいだに、行動力あふれる小木曾さんはもう動きだしていた。

「おい、深谷さん、こっちこっち!」。私たちばかりでなく周りの人も振り返るくらいの声で深谷さんに呼びかけた。もちろんそうしないと深谷さんに聞こえるわけもないが、周囲の反応が少し気になった。小木曾さんの行為はどうやら人々の笑いを誘ったようだが、その理由は声の大きさばかりではなさそうだ。

とにかく深谷さんが私たちのところまで来て、5人は案内板のいう方向へと歩き始めた。するとすぐに人々の反応の理由がわかった。なんのことはない、案内板は、私たちが「2階」にのぼってきたところに、展望台へのエレベータの後ろをまわって戻ることを指示するだけのものであって、下に降りるのに別の通路があるわけではなかったのだ。当然、その通り道に深谷さんもいたわけで、何もエレベータを降りたところで深谷さんと呼ばなくても良かったのである。

このことに気がついて、私たちは思わず顔を見合わせて笑いだした。小木曾さんの行動は拙速といえば拙速だが、しかし間違った行為では



ない。速すぎるための失敗は今回のように笑い話ですむが、遅すぎるための失敗はそれではすまないことが多い。小木曾さんのような人が一緒だと、大きな安心といくらかの笑いとともに行動することができる。

第15話 / ガイドブック

通天閣を出た私たちは次にどこに行くかを話し合った。斎藤さんが美術館、動物園、四天王寺などの候補をあげるが、中途半端な時間だけにどれもじっくりとこない。「四天王寺って何があるの」とは小木曾さん。「四天王があるんだよ」と斎藤さん。こんな間の抜けた会話をしながら時間が過ぎていく。

そのうち何を思ったのか小木曾さん、ストリップを見に行こうと言い始めた。「それは構わないけど、ここらにストリップやっているところなんてないんじゃない」と斎藤さん。「そんなはずないよ。だってガイドブックに書いてあったもん」。小木曾さん、反論にも気合が入っている。「でもここまで歩いてくるあいだにそんなものなかったでしょ」。斎藤さんが再び切り返しても、「いや、ガイドブックに書いてあるんだから、きっとどこかにあるはずだよ」と頑張る。そこまでいうのなら少しこの辺りを歩いてみようということになって、5人が動きだした。

だが目につくのは映画館ばかりでなかなか目的のものが見当たらない。「やっぱりないんだよ」。そう斎藤さんがつぶやいたとき、小木曾さんが声をあげた。「あった、あった。ほら、あそこ」。見ると、なるほどそれらしい建物がある。「ほらね、ガイドブックにちゃんと書いてあったんだから」。勝ち誇ったように小木曾さんは言い、弾む足取りでそちらに歩きはじめた。

第16話 / 錯誤

意気揚々と歩く小木曾さんの後をほかの4人が追いかけていく。やがて問題の建物が近くに見えてくると、小木曾さんの足取りが少し重

くなってきた。どうもそれはお目当てのものとは違っていたようだ。さらに近づいてみると、その建物もやはり映画館であることがわかった。

「おかしいなあ。さかんに首をひねる小木曾さん。「確かに書いてあったんだけどなあ。このあたりはそれが有名ですって」。そこで小木曾さんは件のガイドブックをバッグの中から取りだし、その記述を捜し始めた。ところがそのようなことはガイドブックのどこを捜しても書かれていない。通天閣周辺は数多くの映画館があることで有名、と書いてあるだけだった。

「映画館って書いてあるのを勘違いしたんじゃない」。こう斎藤さんに言われると、小木曾さんは先ほどとは打って変わって自信なさそうに、「うーん、そうかなあ。でも…」とはっきりしない言葉を並べるばかり。結局、これは小木曾さんの単なる思い違いということで決着した。まあこうした思い違いをすること自体は珍しい話ではないし、一度思い込んでしまうとなかなか間違いに気がつかないという覚えは誰しも経験のあるところだろう。ただなにゆえに小木曾さんがその二つを取り違えてしまったかは、小木曾さん以外知る由もない。

第17話 / ジャンジャン横丁

肩を落とす小木曾さんを励ましながら進む5人の前に動物園の方向を示す看板があった。向こうに行けば動物園があるのか、とは思ったものの、いまさらそちらに行く気にもなれない。そんな私たちの目に止まったのが、動物園とは逆の方向にある薄暗い、まるで洞窟のような通りであった。私たちは魅入られたようにその通りに入っていった。

まだ日も高いというのに通りの中は真っ暗で、両側の建物から漏れる明かりで道がわかるという具合だった。通りには小汚い飲み屋・雀荘・暮会所などがところせましと並び、驚いたのはこの時間にどの場所にもかなりの人が入っていることだ。しかし中の人たちの様子に決して不自然さはない。おそらく中の人たちにとっての日常がそこにあるのだろう。一日中光の届かないこの通りでは、何曜日の何時であろうとこれと同じ風景を見ることができる。そんな気がする。

私たちが日常の中でいつも意識しなければならない時間という存在はここにはない。ここは私たちが持つ座標軸のひとつを欠いた、まさに異次元の空間なのである。だから居心地はよくない、でもどこかそれを楽しんでいるという不思議な感覚を味わいながら歩いていく。

いったいどれほど歩いたのだろうか。やがて前方に光が見えてきて、私たちは再び時間とともに生きていく世界へと引き戻された。もう少しあの感覚を楽しみたかったという気もしたが、しかし現実には現実でまた楽しい。そう思わせる風景が私たちの目の前にあった。

第18話 / 露店

ジャンジャン横丁という名の亜空間を抜け出た私たちは、そのまま地下鉄の駅に向かうことにしたのだが、そこでやたらと目についたのが露店である。露店といっても多くは地べたにそのまま品物を並べているだけのもので、商品を置く台などを用意しているところは少ない。売物は、どこで拾ってきたのかというような「アクションカメラ」という雑誌を一冊だけポンと置いて座っているオヤジは別格にしても、どこもそのへんの粗大ごみ置場の方がよほどまともなものがありそうだという感じで、いったいここでどんな取り引きが行われているのか想像もできない。もっとも値段の方も300円の背広をはじめ、だまされたと思って払って本当にだまされたとしても惜しくない程度なので、話のネタに買う人がいるのかもかもしれない。先日、「パワーダービー」という5分で遊ぶ気をなくすクソゲーに7,000円も払ってしまった私は、その思いをいっそう強くする。

おかしなのは露店ばかりではない。まともな構えをした普通の店も少し変だ。どうやら同じ人が経営していると思われる同じ名前の喫茶店が3軒並んでいて、そんなに繁盛しているのかと中を見てみると3軒ともがらがらだったり、そうかと思うと、決して古本屋ではなく一応新刊を扱う本屋であるにもかかわらず、何ヶ月も前の雑誌を堂々と並べている店があったりと、どうもこのあたりにもジャンジャン横丁の作り出す空間のゆがみが及んでいるようだ。このままここには

通常の感覚が失われる。そんな不安が頭をよぎったとき地下鉄の駅の入口が見えた。私たちはそそくさと駅の中へと入っていった。

第19話 / 諦観

私たちは動物園前から再び御堂筋線に乗って、今度は梅田へと向かった。朝からさまざまな出来事と遭遇してきたためか、さすがにみんなの表情にも疲れが見える。地下鉄の車内では比較的口数少ないまま梅田に到着した。

梅田に着くともう待ち切れないという様子で深谷さんが競馬専門紙を購入する。それを見て小木曾さん、「そうだなあ。ここで買っておいの方がいいかもしれんねえ。宝塚みたいな田舎には売ってないかもしれんし」などと、宝塚の人が聞くと気を悪くしそうなことを言う。昨年の6月に宝塚に来ている山本君が「大丈夫ですよ。去年来たときちゃんと売ってましたから」と言っているのに、「そうか。でもあそこは本当に何もなかったところだから」と自分の古い記憶を譲ろうとしない。しかし結局は梅田では専門紙を買わず、そのまま宝塚行きの阪急電車に乗り込んだ。

梅田から宝塚までの所要時間は急行で35分。料金は250円。宝塚までの切符を買うとき深谷さんはため息まじりに「安いよなあ」とつぶやく。名鉄の急行で35分というと武豊から金山くらいになる。その間の料金が630円。南成岩からでも金山まで570円だから、確かに250円は驚くほど安い。毎週のように金山に行っている者としては、こういう環境にある人たちがうらやましくて仕方がない。しかしこればかりはどちらが良いとか悪いとか言っても始まらないので、こんなときは「現実はあるがままだに受け入れよう、うん」と自分に言い聞かせることにしている。

電車は思ったよりもすいていたので、5人はロングシート一列を占領して横に並んで座った。ほどなく電車が動き出し、私たちははいよいよこのツアーの本当の目的地へと向かうのだった。

第20話 / 休息

宝塚に向かう電車の中で、私たちは深谷さんの買ってきた専門紙をもとにした翌日の予想、宝塚歌劇に対するイメージ、宿泊予定の碧山荘の小木曾さんご推薦の鍋料理への期待など、とりとめもなく語り合っていた。しかし次第にみんなの口数が少なくなっていき、やがて話に参加する者が一人二人と減っていった。

深谷さんと専門紙をはさんで競馬の話をしていた私はそのことをさほど気にもとめなかったが、ふと回りを見まわすとみんな眠っている。これに気づいた深谷さんと、みんな疲れたんだね、と笑い合ったが、そのうち私にも心地よい眠気がやってきて、からだの求めるまま眠りに入った。

私が目覚めたとき、電車は宝塚の2つ前の駅を出たところだった。まわりではまだみんな眠ったままだ。どうせ宝塚は終点だから乗り過ごすことはないし安心しているのだろうか。まあ良いかと思って前を見ると、斜め向かいのシートに女子校生が2人座っていて、こちらを見て笑っていた。なるほどいかにも遠方からやってきたという風情の男ばかりの5人組が一列に並んで舟を漕いでいる姿は滑稽であろう。なぜか急に気恥ずかしくなってまた顔を赤くする私であった。

第21話 / こだわり

阪急宝塚駅は高架工事に伴って比較的最近建て直されているため、構内は非常にきれいだった。ただ、そういう時間帯のためなのだろうか、やけに人が少なく、全体的にがらんとした印象を受ける。

電車を降りた私たちは競馬専門紙を買うため改札を出たところにある売店に向った。売店には一通りの専門紙が並んでいたのでも、各々が別々の専門紙を買うことにした。そこで私はいつも買っている「競馬ブック」ではなくて、多色刷りで派手さだけが売りの「競馬エイト」を買った。ほかの人も思い思いの専門紙を購入したようだ。

そう思っていたら、小木曾さんが店の人と何やらやり取りしている。「え、『競馬ファン』、ないんですか。じゃあ、いいです。』こう言われた売店のおばさんは、「競馬ファン」とはどこぞの専門紙だ、という怪訝な顔をし、一方の小木曾さんは、やっぱり宝塚は田舎だわ、と言わんばかりの表情をしている。二人の認識の違いは、実は単に文化圏の違いに起因するもので、どちらに優劣があるわけではない。こういうやり取りを客観的に見ることができるとなかなか楽しい。

私たちは駅を出るとそのまま碧山荘に向った。その道すがら小木曾さんはさっきの専門紙の話が続けている。「そうか、『競馬ファン』はないか。あそこの白木さんという人の予想がよく当たるんだわ。僕はいつもあの人の予想を見て馬券を買うんだけどなあ。そうか、ないか。やっぱりここに来る前に買っておけば良かったなあ。よほどお気に入りの専門紙だったらしく、なかなか愚痴は尽きない。結局それは碧山荘が見えてくるまで続くのであった。

第 22 話 / 碧山荘

昨年碧山荘に宿泊している山本君が、その碧山荘が見えたと言って指を差した。碧山荘は古い造りの建物で、前に建っている宝塚グランドホテルとの対照によって古さがいっそう際立つ。「あれがそうなの。』斎藤さんが驚いたように言う。「いや、昔の知多会館よりずっとまともだよ」と、深谷さんが本人以外ピンと来ないたとえを持ち出す。昔の知多会館のことはわからないが、確かに造りこそ古いものの建物自体は手入れが行き届いているのかきれいだった。

門のところインターホンがあり、そこで一度断ってから中に入らなければならないかとも思ったが、まあ別に良いだろうということでそのまま玄関に進んだ。「場所が宝塚だけに、『いらっしやいまーせー』とか言って歌いながら迎えてくれるかもしれない」と斎藤さん。実は斎藤さん、宝塚に着いてからずっとこの調子で、何かにつけて節をつけて歌い出す。ひょっとすると今回のツアーにも、阪神競馬より最初

冗談まじりに言っていた宝塚歌劇の方を見たくて乗ってきたのかも知れない。

残念ながら宿のおばさんはごく普通の対応で迎えてくれた。宿に直行することになっている和泉さんがあるいは先に着いているかと思っておばさんに尋ねたが、まだ誰も来ていないとのこと。私たちはおばさんに導かれて部屋に入り、その後で宿の一通りの案内を受けた。そして後から大勢人が来ることになっているから、できるだけ早くお風呂に入ってほしいと言われた。それならすぐにお風呂に入ろうかということになったのだが、ただ一人行動を共にしない人がいた。

第 23 話 / 経験

お風呂に入る支度をしながら「和泉さん、まだ来ていないみたいですね」と山本君。「遅れて来るのはかまわないけど、いつ頃になるかわらい連絡すればいいのに」と斎藤さんが言う。すると小木曾さんが追い打ちをかける。「まったく彼は団体行動ができないんだから」。

ところがその小木曾さんが突然、「みんな、先にお風呂に入っていていいよ。僕はもう少し『競馬ファン』を捜してくるから」と言い残し、そのまま宿から出て行ってしまった。その突然の行動にしばらくあっけにとられていた私たちだが、やがて誰からともなくお風呂の方へと向かっていった。

碧山荘のお風呂は離れにあって、渡り廊下を通るとき向かいのグランドホテルが正面に見える。おそらく向こうからもここが見えるのだろうなと思うと、なぜか急ぎ足になってしまう。湯舟は3人がつかれる程度の大きさで、決して大きくはないが、寮の風呂に比べるとさすがにきれいだ。

最初に湯舟につかろうとした斎藤さん、足を入れるが早いかいきなり声を上げた。「熱い」。私もお湯に手をひたしてみるが、なるほどこれは熱い。そこで深谷さんと私は先に体を洗い、斎藤さんはというと、水道の蛇口を全開にしてそのそばに恐る恐る体をつけていく。

体を洗い終わる頃になっても、依然として斎藤さんの熱そうな格好は変わらない。これじゃあしばらく入れそうにない。そう思ったとき、斎藤さんがまた声を上げた。「あ、何だ。ここのお湯を止めればいいのか」。そう、実はお湯の方も目一杯出しつづけていたのである。これではいつまでたってもお湯は熱いままだ。

こうして何とか湯舟につかれるくらいになったころ山本君が入ってきた。前にここに泊まっている彼は、ここのお風呂は全員が一度に入るには狭いと考えて、少し遅れてやってきたのだ。結果的に山本君は最良の行動をとったことになる。やはり何事においても経験は重要である。

第 24 話 / 静寂

お風呂から上がった私たちは、最初はお茶をすすりながら雑談していたものの、翌日の競馬がやはり気になる。各々が買って来た専門紙を取り出しレースの検討に入っていく。みな表情も次第に真剣になっていき、やがて静寂が私たちの部屋を支配した。

その静寂を破ったのは小木曾さんだった。「やっぱり『競馬ファン』はなかったわ」。そう言いながら部屋の中に入ってきた。「どうして置いていないのかなあ。白木さんの予想は本当によく当たるのになあ。やっぱり宝塚にはないのか...」。どうしてもその専門紙があきらめきれない様子で、手に入れられなかった不満は宝塚の町の方に向けられているようだ。しかし行動は相変わらず素早い。「じゃあ僕はお風呂に入ってくるから」。私たちに声をかける暇すら与えず再び部屋から出ていった。部屋にはまた静寂が訪れた。

「お食事の用意は何時頃にしましょうか」。今度は宿のおばさんの声で静寂が破られた。「あらあら、みなさん明日は競馬に行かれるんですか」。部屋に入ってきたおばさんはそう言いながら笑った。なるほど全員が黙って競馬専門紙をのぞき込んでいる姿は、端から見ればかなり異様だろう。「本当は宝塚歌劇を見たかったですけどね」と斎藤さんが言うと、おばさんはさらに大きな声で笑い出した。私たちの姿はよ

ほど宝塚歌劇のイメージにそぐわないらしい。おばさんの反応に私たちはただ苦笑するほかなかった。

第 25 話 / 欠席裁判

「食事は 5 時半でいいですかね」。おばさんが話を元に戻す。「もう一人がいつ来るかはっきりしないんだけど、とりあえずそれでいいです」。斎藤さんがそう答えると、おばさんはうなずいて出ていった。するとそれと入れ替わるように小木曾さんがお風呂から帰ってきた。

「食事は 5 時半で言っといたけど、いいよね」と斎藤さん。「ああ、いいよ」。小木曾さんが答える。「和泉がどうなるかわからないけど」、「和泉君かあ。彼は団体行動ができんのだ。いつでもすぐ統制を乱すんだから」。

そして 5 時半になっても、予想通りというか、和泉さんは来なかった。すでに肉や野菜がテーブルに並べられていたが、もう少し待つことにした。部屋には暖房が入っているのでかなり暖かい。まだ食べないのなら肉を縁側に出しておいた方が良いとおばさんに言われ、私たちはそれにしたがった。

料理を目の前にしながらそれに手が出せない不満がつくる。「連絡があつたらいいのですけど」。このおばさんの一言でみんなの不満が一気に表に現れた。「ほんとだよ。電話くらい入れりゃあいいのに」。「もう、彼は自分勝手なんだから」。「いつものことといえば、いつものことですけどね」。「まあまあ、和泉さんにも事情があるのでしょう。もう少しやり方があるとは思いますが」。「今頃のこのこやってきても、食わしてやらん」。当人不在の中、私たちは口々に和泉さんを非難する。そしてやはり小木曾さんがこうしめくくった。「やっぱ、彼は団体行動がだめなんだわ」。

しかしいくら不満を言い合ったところで和泉さんが現れる気配はなく、空腹を抱えながらむなしく時間が過ぎていった。

第 26 話 / すき焼き

「このまま待っていても仕方ないから食べよう。和泉もそのうち来るだろう」。30分ほど待ってから斎藤さんがこう言うと、みんなそのきっかけを待ってたという感じで同意した。

碧山荘の夕食は小木曾さんご推薦のすき焼きだ。用意された鍋はふたつで、ひとつを深谷さん、小木曾さん、私、もうひとつを斎藤さん、山本君で囲んだ。この組み合わせは絶妙というか何というか、見事に対照的な鍋を出現させた。

ふだん家でやっているという山本君と、鍋の美学を追求する斎藤さんが作る美しいすき焼き。一方、不器用でしかも大雑把な私と、後のことを考えるよりも先に動いてしまう小木曾さん、それに一見冷静なようで実は衝動的な部分を持つ深谷さんが作る不細工なすき焼き。同じ素材からかくも大きな差が生まれるものなのかと奇妙な感動を覚えるほどであった。

「なに、味は変わりはないよ」とは深谷さんの言。確かに、空腹をこらえていたためか、あるいは素材が良かったからか、いい加減に作ったわりにはおいしく食べられた。しかし和泉さんの食べる分を見込んで頼んでいた肉の量を平らげることは容易ではない。最初はおいしく食べていたのだが、やがて残っている肉の量に嫌気がさしはじめる。

食べる方が一段落したころまた宿のおばさんがやってきて、鍋を片づけるかどうかをたずねた。「でもまだひとり来てないんですね」。こう斎藤さんが答えたあと、今度はおばさんもいっしょになっての和泉さんへの非難がまたひとしきり続いた。結局もう少しだけ待つということにして、おばさんが部屋から出ていった。やれやれという表情で私たちが顔を見合わせていると、出ていったばかりのおばさんが急ぎ足で部屋に戻ってきた。

第27話 / 登場

「来た来た、来ましたよ」。部屋に入ってくるなりおばさんがこう言った。見ると後ろから和泉さんが笑いながら入ってきた。「いやあ、どうもすみません。みなさん、もうご飯食べられましたよ。和泉さんと

は今朝電話で話しているはずなのだが、和泉さんの例の口調が妙に懐かしく聞こえる。「当り前だよ。ほら、そこに和泉の分を残しておいたから、全部食べるよ」。そう言って斎藤さんは私たちが食べ残した肉を指さした。「わあ、どうもすみません」。いつものように笑いながら答える和泉さん。和泉さんのいつも通りの振る舞いは、知多を出てきたことが遠い過去のように感じていた私たちの感覚を、少しばかり引き戻したように思える。

そのためだろうか、それまで特に気にならなかったその日一日の疲れを覚えるようになった。和泉さんは残った肉をあっさりと平らげてお風呂に行った。残ったメンバーはお酒を飲みながらテレビをぼーっと見て、とりとめのない話をしている。かといって退屈なわけではない。みんな心地好い疲労感を楽しんでいるかのようだ。やがて和泉さんが戻ってきたが、状況に大きな変化はなかった。その心地好さが本当の疲れに変わらないうちに寝てしまおうと考えることは自然な流れであろう。私たちは部屋を片づけて眠りにつく準備を始めることにした。

第28話 / 就寝

私たちがそれまでいた部屋に6人寝るのは狭いだろうということで、もうひと部屋が私たちに用意されていた。そこでふた部屋に4人・2人に分かれて寝ることになったのだが、問題はその分かれ方である。「それじゃあ深谷さん、年寄り二人が向こうで寝ますか」と小木曾さん。すかさず斎藤さんが言う。「ちょっと待ってよ。俺は和泉と寝るのはいやだよ。小木曾さん、向こう行くんだったら、和泉も連れてってよ」。「ええっ、和泉君と二人きりだと襲われてしまうかもしれん」。「ちょっと、何ですか。一緒に寝ましょうよ、小木曾さん、斎藤さん」と、やはりいつものように笑いながら和泉さんが言う。「だってお前、寝てると抱きついてくるじゃん」。「そんなことはないですよ」。

この後、多少のやりとりがあって小木曾さん、「やっぱり年寄り二人が向こうに行くわ」と言い残し、深谷さんと一緒にしれっと部屋を出ていってしまった。残された4人は仕方がないといった感じで顔を見

合わせ、そして布団を敷きはじめた。「俺は和泉と顔を合わせんのかいだから、壁を向いて寝るよ」。斎藤さんは真っ先にそう言うと、一番端っこを占領して本当に壁の方を向いてしまった。おやおやと思って反対の方を見ると、こちら側の端っこは山本君がすでに押さえている。和泉さんと私はそのあいだに並んで寝ることになった。

すばやく両端を占有した二人、さらにいえば別の部屋に行ったもう二人の選択は正しいものだったかもしれない。だがこの段階ではそんなことがわかるはずもなく、電気を消した後もしばらくのあいだ、私は和泉さんと馬を買う話などをしていた。そのうち和泉さんは眠りに入り、私も静かに目を閉じた。

第 29 話 / 再び長い夜

夕食、そしてその後にアルコールが入ってから、私は昨日に続いてからだのかゆみを感じていた。ただ起きているあいだは気にはなるが苦痛というほどではない。問題は寝るときだ。それまで苦痛と思わなかったかゆみも、眠ろうとする場合にはたいへん邪魔になる。すんなり眠りに入れなければ次第に苦痛を覚えることになる。

そんなわけで私は早く眠ろうと、なるべくかゆみを意識せずからだをかかないようにして目を閉じた。ところが隣から気になる音が聞こえてきた。和泉さんのいびきである。気にしないように気にしないようにと思うほど眠りから遠ざかる。意識がどんどんはっきりしてくるようだ。

眠れない時間が長くなるにつれじんましの症状が苦痛に変わっていく。もはやがまんできなくなったとき、私は上体を起こして全身を激しくかきはじめた。からだをどんなにかいたところかかゆみがおさまるものではないが、そうせずにはおれない。どうせ横になっても眠れるものではないのだから。

こうして私はずいぶん遅くまで眠ることができなかった。が、このとき外がどうなっているかに気づくこともなかった。

第 30 話 / 先即制人

どうしても寝つけないまま隣を見ると和泉さんが気持ち良さそうに眠っていた。何人が一緒に寝る場合は、とにかく早く寝た者が勝ちということだ。さすがに斎藤さんはそこを承知していたのだろう。いち早く壁を向いて寝てしまい、和泉さんのいびきにもびくともしない。一方、山本君の方を見ると動きが多い。おそらく熟睡にはいたっていない。彼も誰かがいびきをかくことは予想していたかもしれないが、まさか夜中からだをぼりぼりとかきむしる音がすぐ隣から聞こえてこようとは考えていなかったろう。

眠れないまでも少しは横になっていないと次の日がつらくなる。そう思った私はふたたび布団の中に入った。すると入れ替わるように斎藤さんが起き上がり部屋を出ていった。しばらくすると斎藤さんが戻ってきて、また前のようにぐっすり眠りに入る。こんなに簡単に寝つける斎藤さんがこの日ばかりはうらやましくて仕方がなかった。

このまま朝まで眠れなくても良いから、とりあえず目だけは閉じていよう。そんなあきらめに似た気持ちになったとき、私の体から力が抜けて意識が薄らいでいった。

第 31 話 / 情報

ようやく眠りについた私をふたたび目覚めさせたのは小木曾さんの声だった。「たいへん、たいへん、大雪だわ」。部屋に入ってくるなりこう言うと、みずから障子を開けて外の風景を私たちに示した。そこで私は布団から起き上がって外を見たが、なるほど見事に雪が積もっている。私と和泉さんがそれに驚くと、小木曾さんはどうだと言わんばかりの勝ち誇った様子を見せた。別に小木曾さんが雪を降らせたわけでも、また雪が降ることを望んでいるわけでもないのだが、他人より早く情報を得るということはそれ自体が喜びとなるのだろうか。その一方で斎藤さんの妙にさめた態度がおもしろい。斎藤さんは夜中に部屋を出たときに雪が降っていたことを知っていたらしい。ここであ

えて小木曾さんと対照的な行動をとることで、人に先んじていた喜びを味わっているのかもしれない。

「まったく、和泉君の心がけが悪いから雪が降ってしまった。」「ちょっと小木曾さん、何ですか。」「どうもこの二人は昨日のことをまだ引きずっているようだ。ひょっとするともっと前から似たようなことを繰り返しているのかもしれない。そんな中、山本君はテレビを見て冷静に情報を集める。テレビはいやなニュースを私たちに告げる。名神高速が雪で通行止めになっているというのだ。阪神競馬場で開催があるときは、競走馬は滋賀県栗東町のトレーニングセンターから競馬場に輸送される。名神が不通となれば当然輸送が困難になる。競馬開催はかなり微妙だ。

私たちの頭の中を最悪の事態への予感がよぎったとき、宿のおばさんが部屋に入ってきて、朝食の支度ができたことを告げた。

第 32 話 / 隔靴搔痒

おばさんの指示にしたがって私たちは食堂に向かった。おばさんは私たちに「残念な天気になりましたね」と声をかけたが、表情にはその言葉に似つかわしくない笑顔が浮かぶ。なにやら他人の不幸を楽しんでいるかのようにも見える。

食堂に行く途中に電話があるのを見つけ、山本君が JRA のテレホンサービスに電話をかける。しかし電話はつながらなかった。どうもこの状況で考えることは誰もが同じらしい。

食堂では競馬が開催されるかどうか話題の中心になった。台風が来ている中でも平気でレースを行う JRA も雪にはまるで弱い。最近開催が中止になるケースはほとんどが積雪によるものだ。今回もあまり良い見通しは立たず、会話も沈みがちになる。

そんな中、和泉さんだけは能天気にご飯を食べていた。「みなさん、もう食べられないのですか」と、空になったお櫃を見ながら言う。どうやらご飯をもらいにいく口実がほしいらしい。「そんなに食いたきゃ、

おばさんに言ってご飯もらってくりゃいいじゃん。」「斎藤さんにそう言われると、それではとばかりに空のお櫃を持ってご飯をもらって来た。

和泉さんが満足するのを待って、私たちは食堂を片付けて部屋に戻った。その途中、小木曾さんと山本君がもう一度電話をかけたが、やはりつながらない。部屋でもテレビを見て情報を求めたが、さすがに競馬の開催についてはニュースでは扱っていない。JRA は特定の時間に開催の情報をテレビ・ラジオで流しているのだが、それがいつ、どの局に流れるのかを誰も知らないものだから、ただやみくもにチャンネルを変えることしかできない。知りたい情報が得られないもどかしさを感じる中、宿を出る時間は刻々と近づいてきた。

第 33 話 / 転換

もう一度電話をかけてみると言ってまた山本君が部屋から出ていった。そのあいだ私たちはもう競馬が中止になったときのことを考えはじめていた。「競馬がダメなら競艇に行こうか。」「いや昨日見ることができなかった吉本新喜劇にしよう。」「いやいや昨日見れなかったというならストリップだわ。」「競馬関係だとちゃやまちアプローズという手もありますね」などなど。その切り替えの速さは見事というほかはない。しばらくして山本君が帰ってきて開催延期の決定を伝えたと、それはまるですでに予期されていたことのようにさえ思えた。

深谷さんが有馬記念の当り馬券の払い戻しをしたいというので、せっかくここまで来たのだし、開催はなくても払い戻しくらいはやっているだろうということで、とりあえず阪神競馬場に向かうことにした。宿を出るときおばさんが「今回は残念でしたけど、また来てくださいね」と言うと、「今度は宝塚歌劇を見に来ますよ」と斎藤さんが答える。するとおばさんはまた大きな声で笑い出した。

私たちは碧山荘を後にして阪急宝塚駅に向かった。今度は今津線で仁川まで電車に乗る。駅の切符売場の前では JRA の職員が立って、開催が月曜に延期されたことを告げていた。そのすぐそばで私たちが仁

川までの料金を確認するのを彼らは怪訝そうな顔で見ているが、しかし私たちに対して何か言うということもなかった。

乗り場に行くところちょうど西宮北口行きの電車が入ってきた。始発なので難なく座れたが、昨日のこともあるので2・3人ずつにわかれて座った。そのうちどんどん人が乗ってきて、ある程度立つ人も出てきたころ電車は宝塚を出発した。

第34話 / 仁川

宝塚駅を出た電車は宝塚歌劇場の脇を通って南へと走る。名残惜しそうに歌劇場をながめる斎藤さんの顔が印象的だった。仁川は宝塚から4つめの駅で、途中、逆瀬川など競馬のレース名としてなじみのある地名にも出会い、確実に競馬場に近づいていることを感じる。電車は駅ごとに多くの学生や通勤客を乗せ、仁川に着くころには満員の状態になっていた。こうしてみるとやはり週休2日はありがたい。

仁川駅で降りると、ここでもJRAの職員が開催の延期を告げていた。私たちはかまわず競馬場の方に歩いていった。人のいない競馬場もまたおもしろいかもしいかと思っていれば、意外にも私たちと同じように競馬場に向かう人が結構いるのである。そのためだけでもないだろうが昨夜からの雪が踏み固められ路面が滑りやすくなっている。

困ったことに阪神競馬場に行くには途中階段を降りなければならないところがあり、そこがかなりおっかない。恐る恐る階段をおりると上の方からたどたどしい日本語が聞こえてきた。「キョウハ、ケイバ、アリマセン」。見るとイラン人風情のお兄さんがこちらを見ていた。すると何を思ったか斎藤さん、「オーケー、オーケー。アイノウ、アイノウ(OK, OK. I know, I know)」と相手に負けないくらい発音も文法も怪しげな英語で答えた。あつげにとられる相手をよそに、私たちはそのまま競馬場へと歩いていった。

第35話 / 写真

阪神競馬場は数年前に大規模な改装があり、関西では最もきれいな競馬場だと言ってよいだろう。中京競馬場と同じように入場門は2階にあるが、今回は払い戻しが目的なので1階の方に向かった。ところが肝心の払い戻し場には人がまったくいない。どうしたことかと近くにいた警備員とおぼしき人に尋ねてみると、払い戻しは行方が10時からとのこと。時計を見るとまだ1時間近くある。近くに時間をつぶせるようなところも見あたらず、結局、払い戻しは大阪のWINSで行うことにした。

とはいえ、このまま帰るのもつまらないので、ここで記念写真を撮ることにした。阪神競馬場を背にひとりずつがカメラの前に立つ。ただそれだけのことなのだが、実際にやってみるとかなり気恥ずかしい。とくに周りに知らない人の存在を認めると妙に照れくさいのだ。もっともこれは人によって感じ方が違うかもしれない。私は写真が嫌いというわけではないが、ものごとを写真に残そうという意志が極めて希薄で、写真を撮ることにしても写真に撮られることにも積極的ではない。その辺り、カメラを持ってきた小木曾さんや山本君にはきっとまた違った感じ方があるのだろう。

一通り写真を撮り終わると、みんな寒いのが身にしみてきたのか、早く次の場所へ移動しようということになった。次の場所といっても具体的に決まっていなかったのだが、とりあえず大阪に向かうということで駅の方に歩き出した。さっきの場所にはまだ例のお兄さんがいて、今度は雪だるまを作っている。雪の日にはやることは何処も同じらしい。

第36話 / 阪急電車

阪急仁川駅から今度は西宮に向かう。仁川についた電車はさすがに満員でかなり窮屈な思いを強いられる。考えてみれば知多に来て以来、満員の電車に乗るなどということは数えるほどしかなく、これも久しぶりに味わう新鮮な体験と言えは言える。とはいえやはり窮屈なものは窮屈だ。仁川から西宮北口までのわずか3区間がやたらと長く感じられた。ようやく西宮北口について電車を降りると、冬の冷たい空気

がとてもさわやかだ。慣れない混雑で乱れた呼吸を整えてから、私たちは梅田行きの電車に乗り換えるため神戸線のプラットフォームに向かった。

それにしても宝塚駅といい、この西宮北口駅といい、阪急の駅はどこもきれいだ。たまたま私たちが立ち寄ったところがそうただけかもしれないが、名鉄を代表する新名古屋駅と比べてもずいぶん雰囲気が違う。料金とともに、名古屋では越えることのできない壁のようなものを感じる。やはりこれもあるがままに受け入れなければならないのだろうか。

阪急神戸線は雪のためダイヤが大幅に乱れていた。今津線は各停しか走っていないから、ダイヤの乱れといっても全体が順繰りに遅れていくだけだが、特急や急行の走っている神戸線では、次に到着する電車、次に発車する電車は何なのかを駅の方でも把握できないありさまだ。私たちはとりあえず停車中の普通電車に乗って状況を見守っていた。するとしばらくして特急の到着と、その特急が先に発車する旨を告げるアナウンスがあり、ほどなく電車がプラットフォームに入ってきた。

第 37 話 / 別世界

私たちは特急に乗り換えて、電車の中で大阪に着いてから何をするかを話し合った。そこで私はかねてより希望を出していたちゃやまちアプローズに行くことをあらためて主張した。もともとの目的がそういうツアーなのだから競馬に関係のあるところに行こうということでみなが合意し、そして阪急梅田駅から近いこともあって、まずはちゃやまちアプローズを目指すことになった。

ちゃやまちアプローズとは JRA の広報センターで、阪急梅田駅から 5 分ばかり歩いたアプローズタワーの 10 階にある。梅田駅に到着した私たちは駅の案内板でアプローズタワーの位置を確認した。どうやら阪急ホテルに隣接しているらしく、とりあえずそちらを目標にしてアプローズタワーを捜そうと歩き出した。ところが阪急ホテルはわけな

く見つかったが、肝心のアプローズタワーらしきものが見あたらない。外は寒いしせかく来たのだからというわけのわからない理由に、お互いがなぜか納得して目の前の阪急ホテルの中に入っていった。

当然のことながら建物の中は驚くほどきれいで、小木曾さんに代表される私たちのなりはその場の雰囲気と著しく調和を欠いていた。ふと見ると喫茶店があったのでその表に置いてあったメニューをのぞいてみる。そこには文字通り「桁が違う」数字が並んでいた。またその近くに旅行用のバッグを並べたウィンドウがあったが、こちらの数字はさらに私たちの感覚から大きくかけ離れたものだった。あまりの居心地の悪さに、私たちは早々にその場を離れて、ふたたびアプローズタワーを捜すことにした。

第 38 話 / アプローズタワー

私たちはふたたび外に出てアプローズタワーを捜した。しかしさきほどまでいた阪急ホテルのまわりにはそれらしいものが見あらず、もう少し歩いてみようかと話し合っていた。そのとき私たちが出てきた入口から少し離れた別の入口に目をやると、そこに「Apprause Tower」と書かれているではないか。なんのことはない、阪急ホテルとアプローズタワーは中が仕切られているだけで、外見上はまったく同一の建物だったのである。

私たちは「Apprause Tower」とかかれた入口から建物の中に入ったが、居心地の悪さはやはり阪急ホテルと変わらない。エレベータのところにある案内板で 10 階に「JRA」の文字を見つけると、さっさとエレベータに乗り込んで 10 階へとのぼっていった。エレベータを降りてすぐ右手に目的の JRA 広報センターがあった。

名前こそ大仰だが、スペースはさほど広くない。競馬関係の書物や雑誌、共同馬主クラブのパンフレットなどがおいてあり、それを自由にみることができる。中の雰囲気も図書館の閲覧室に近い。その一角にぬいぐるみやポスターなどの競馬グッズを並べた陳列ケースがあり、

それらを販売していることがわかる。また別の一角には文字放送受信用のモニタがあった。いつもならレースの情報が流されているのだろう。

しかし私の目に真っ先に止まったのは別のモニタだった。それは過去の主要なレースの実況を、内蔵するレーザーディスクから自由に呼び出せるというものだ。広報センター内にはこのモニタが2台あったが、私たちが広報センターに来たときには2台ともふさがっていた。私は書物を手にとったり、陳列ケースをのぞいたりしながらも、ずっとモニタの状況をチェックしていた。そしてその1台の前から人が離れるやいなや、私は脱兎のごとくモニタの前へと駆けつけた。

第39話 / 懐顧

モニタの前に立った私は最初にどのレースを見るかを思案した後、私が競馬の世界にひきこまれるきっかけとなったレースを選んだ。ミスターシービーが3コーナーから豪快なまくりを決めた菊花賞である。

見たいレースを指定してからレースの実況が始まるまで少し時間がかかる。このあいだ、ほかの人が何をしているのかが見てみると、みんな思い思いにこの場を楽しんでいるようだ。競馬グッズに見入る山本君、小木曾さん。共同馬主クラブのパンフレットを広げる和泉さん。競馬の資料を丹念に読んでいく深谷さん。それぞれの競馬に対する姿勢を表しているようでなかなかおもしろい。

そう思っていると斎藤さんがこちらにやってきた。ミスターシービーのレースを見終ると、斎藤さんは次々に、こんなレースはないか、とリクエストしてくる。まずは最初から最後までぶっちぎりの圧勝ということで、テスコガビーが勝ったときの桜花賞。次のリクエストは派手な追い込みで圧勝したレース。そこでサッカーボーイが勝った阪神3歳ステークス。今度は笑う馬が見たいということで、ダイタクヘリオスのマイルチャンピオンシップ。落馬シーンが見たいということで、メジロデュレンの有馬記念(落馬したのはメリーナイス)。ついでにロンシャンボーイが勝った昨年の京阪杯(空馬のワイドバトルが一番最初にゴール板を駆け抜けた)。

こんな感じで次々にレースを見ていくと本当に時間が過ぎていくのを忘れてしまう。斎藤さんもレースごとに「おお」と言っては楽しんでいるようだし、私もそれらの実況をついこのあいだ聞いたようにさえ感じ、かつてその結果に一喜一憂したことを懐かしく思い出していた。おそらくそうした気持ちがあるうちは競馬をやめられないのだろう。

第40話 / ポスター

いくら楽しくても、お昼が近くなるとさすがに空腹を覚える。6人が自然に集まり、ちゃやまちアプローチを後にして食事に行くことが決まった。広報センターを出てふと見ると、小木曾さんと山本君が昨年の春の天皇賞のポスターを手にしている。「あれ、それ買ったの」。斎藤さんがすかさず尋ねる。「いや、これがただなんだわ」。小木曾さんが答える。「山本君が目ざとく見つけてくれてねえ」。「何か買おうかなと思っていたら、無料ですって書いてあったんですよ」。山本君が得意気にいう。小木曾さんもごひいきのライスシャワーの雄姿に満足そうだ。「パーマー、マックイーンが写っていなかったらもっと良かったのに」などと不平を漏らしながらも、表情にはいささかの曇りもない。ほかの4人は素直に羨望の眼差しを向け、2人が素直に喜ぶ。これはなかなか良い。

私たちはアプローチタワーを出て、ふたたび梅田駅に向かった。これから名古屋に帰るまで、難波辺りで遊んでいようということになり、地下鉄の駅を捜したのだがこれがなかなか見つからない。しばらくうろろした後、ようやく御堂筋線の案内板を見つけ、何とか地下鉄の改札にたどり着いた。

第41話 / 自信

地下鉄御堂筋線の改札口の向かいには阪神百貨店の入口がある。それを見た小木曾さん、「そうそう、阪神百貨店の地下のいか焼きがうまいんだわ」と思い出したように言う。これを聞き逃す和泉さんではな

い。ほとんど瞬時に反応する。「そうなんですか。じゃあ食べに行きましょうよ。」「え、行くの。本当に行くんだったら場所知ってるから案内するよ。みんなどうします」。何だかんだ言っても、やはりこの二人には波長がぴたりとあうところがあるらしい。ほかの人たちもかなり空腹を感じていたところだから、いか焼きを食べることに異存はなく、小木曾さんの先導について阪神百貨店の中に入っていった。

中に入っても小木曾さんは目的地に向かってずんずん進んでいく。「知っている」というだけあって自信にあふれた足取りだ。ところがその足取りが急に重くなり、ついにはぴたりと止まってしまった。どうしたのかと思って小木曾さんを見ると、さかんに首をかき上げて言う。「おかしいなあ。確かこの辺だったんだけどなあ」。だが周囲にはそれらしい店はなく、その先には行き止まりが見えている。

「そこに案内板がありますよ」。山本君が指を差す方向に店内の案内図があった。「あ、何だ。向こうの方だったのか。今度は大丈夫」。案内板を見てこう言うと、小木曾さんはふたたびずんずん歩きはじめた。

第 42 話 / 拙速ふたたび

案内図の示す方向にずんずん進む小木曾さんの足がふたたび止まる。前にはガラスの扉。その先には上へのぼる階段が見える。周りを見てもやはりいか焼きを売っているらしい店は見あたらない。「おかしいなあ。案内の通り来たはずだけど」。もう一度首をひねる小木曾さん。「人に聞いた方が早そうだね」と斎藤さん。「じゃあ、そうしましょう」。和泉さんはこう言うが早いか、もう近くのお店のおばさんにいか焼きの店の場所を尋ねていた。

おばさんの話を聞いて、小木曾さんの歩く方向が間違っていたわけでも、案内図に嘘があったわけでもないことがわかった。実は扉の向こうに見える階段の手前に細い通路があり、そこを入ったところにか焼きの店があるのだ。おそらく案内図にはそのことがきちんと書かれていたのだろうが、私たちは大体の位置を確認しただけで動き出し

たので、あと一步のところ足踏みをしてしまったわけだ。通天閣での一件を思い出させる出来事だ。

狭い通路にはいか焼きを買う人の列ができていた。6人がここに並んでも仕方がないので、斎藤さんと山本君が列に並び、ほかの4人は少し離れたところで待つことにした。ところがふと見ると和泉さんがいない。そして小木曾さんが言う。「ほんっと彼は団体行動がだめだな」。

第 43 話 / いか焼き

店の前の行列は短くなかったが、進み具合が速いのだろう。思ったほど待つこともなく、斎藤さんと山本君がいか焼きを手にして戻ってきた。だが依然として和泉さんの姿は見えない。「まったく彼はいつもこうなんだから」。例の調子で小木曾さんが言う。「いないのなら、和泉の分食っちゃおうぜ」。斎藤さんがこう言ったとき、和泉さんが姿を現した。「あ、みなさん待ってました?。どうもすみません」。そう言いながらも、和泉さんはさっさといか焼きを手にして食べはじめた。これを見てほかの人もやれやれという感じでいか焼きを食べる。

いか焼きは要するにたこ焼きのたこがいかにか変わったのもだが、ただ両者の形状はかなり違う。いか焼きはたこ焼きように球状ではなく、お好み焼きのように平たく焼いてあるのだ。いか焼きを食べてみるとこれがおいしい。金龍ラーメンでは前評判があてにならないことを感じたが、こちらの方はなるほど行列ができるだけのことはある。いか焼きを食べ終わった和泉さん、「みなさん、もうひとつ食べませんか。僕が並んできますから」。よほどこのいか焼きが気に入ったらしい。しかしみんなのおなかも少し落ち着いたし、深谷さんも馬券の払い戻しが気になるということで、WINSのある難波に向かうことになった。

第 44 話 / お好み焼き

難波に着いたらお好み焼きでも食べようと話しながら私たちは地下鉄に乗った。お好み焼きといえば、私は広島出身であるがゆえに多

少のこだわりを持っている。ご存じの通り、広島のお好み焼きと関西のそれとではずいぶん違う。別にどちらがおいしいというつもりはないが、広島のお好み焼きがまがいもの扱いされるのは不愉快だ。ましてモダン焼きと同一視するなど論外である。もっともこの大阪で広島風のお好み焼きを求めることは、いわばパリで中華料理を求めるに等しい。それは限りなく不可能に近いし、また無粋というものだ。料理の仕方はどうあれ、おいしいものはおいしいのだから。

そんなことを考えていたら、あっという間に難波に着いてしまった。駅を出ると昨日見たばかりの風景が広がっている。が、なぜかこれがなつかしい。昨日からの出来事は、日常の生活でのそれとは密度が違い過ぎているのだろうか。ともあれ私たちはお好み焼きの店を探して、昨日歩いた難波界隈をふたたび歩き始めた。

第45話 / 対照

広島もそうだが、大阪でもやはりお好み焼き屋は多いようで、あちこちでお好み焼き屋ののれんを目にする。しかし時間がちょうど昼時ということもあって、どの店も満員だ。どうしたものかと思っていると、妙に目立たないところに入口のある店が目にとまった。あるいはここならばと考えてその店の前に行ってみる。店の前にはお好み焼きのサンプルが並んでいるが、これがやたらと小さい。本当にこんなに小さいのか見てみたかったのだが、中をのぞいてみるとここも超満員。残念ながらこの店もあきらめるほかなさそうだ。

そう思ってお好み焼き屋の向かいに目を転じると、「本格インドカレー」を名乗る店があった。昨日は自由軒のカレーを食べ損ねているし、カレーを食べるのもいいかもしれない。私たちはそう考えてそのカレー屋へと足を進めた。ところが中を見てみると、前のお好み焼き屋とは対照的に客が一人として入っていない。ほかの店では行列さえできているというのにこの状態というのはあまりにも怪しすぎる。いくらすいていてもそのカレー屋に入る勇氣はなく、私たちはお好み焼き屋を求めてふたたび歩き出した。

カレー屋の前を後にした私たちの後ろから大きな声が聞こえてきた。振り返るとリヤカーを引っ張っているオヤジがこちらに近づいてきた。声は大きいのだが言葉が判然とせず、何を言っているのかさっぱり聞き取れない。その分、気味の悪さが大きくなる。これは変に関わるべきではないと直感した私たちは、そのオヤジから視線をはずすようにして声を通り過ぎるのを待った。まったくこの界限には一癖も二癖もありそうな人間がごろごろしている。

大声が遠く離れたことを確認して視野を本来の位置に戻すと、一本の脇道が目にとまった。その先にはお好み焼き屋の看板がある。こんな場所にある店ならすいているかもしれない。そんな期待を抱いて私たちはその店へと向かった。私たちの推測はおそらく正しかったのだろう。だが遅すぎた。その店のシャッターは固く閉ざされており、もはや営業していないことは誰の目にも明らかだった。

欲しいものを目の前にしながらそれを手にすることのできないイライラがつのる。もうお好み焼きでなくてもいいや。そんなあきらめにも似た気分で脇道の角をひとつ曲ると、私たちに思わぬところから声がかかった。

第47話 / 疑問

「ちょっと、おにいちゃん。どう、はいらへん?」。それはのぞき部屋の呼び込みのお兄さんだった。この界限ではのぞき部屋の看板を手にとらずむ人たちがやたらと目についたが、まさかこんな人通りもろくない脇道でまでそんな人に遭遇するとは思ひもしなかった。それにしてものぞき部屋とは不思議な商売だ。そもそもこんなところにあえて行こうという人がどれほどいるのか疑問だし、それでいてこんなに数があるのはどうしてだろう。

呼び込みのお兄さんの勧誘はさらに続く。「ねえ、どう。安くしとくよ。みんなまとめて千円でいいよ」。まるでバナナの叩き売りか、得

体の知れない品物のテレビショッピングだ。こんなことを言われたら、ますますもって怪しさを覚えるわけで、いよいよ足が遠のいてしまう。まったくこんな勧誘に乗ってのぞき部屋に行こうと思う人間の顔を見てみたい。

そんなことを考えながらそのお兄さんの前を通りすぎようとしたとき、後ろからこんな声が聞こえてきた。「ほお、千円か」。振り返ると見慣れた顔がそこにあった。私が見たいと思った人間の顔をこんなに早く、そしてこれほど身近に見つけることができようとは。これには私もただ苦笑するほかなかった。

第48話 / 遅疑

声の主は、やはりというか、小木曾さんだった。「千円だったら…。みなさんどうします」。どこまで本気で言っているのかはかりかねて返事を躊躇していると、すかさず和泉さんが反応する。「いいですね。行きましょうか、小木曾さん」。こういうときの二人の呼吸は見事なほど合っている。

「俺は行かないよ」。斎藤さんがあきれたように言う。「こんなの千円だってもったいないよ。それより早く飯を食いに行こうよ」。深谷さん、山本君も斎藤さんの言葉をもっともだという顔で聞いている。ところが小木曾さん、和泉さんはそうは思っていないようで、未練がましく呼び込みのお兄さんの方を見る。

「そんなに行きたいんなら行ってくりゃあいいじゃん。俺らは先に飯食って待ってるから」。斎藤さんが突き放すように言う。「あ、いや、別にどうしても行きたいというわけではないんですけどね。じゃあご飯を食べに行きませんか」。小木曾さんはここで方向転換。和泉さんはまだがんばる。「ええっ、小木曾さん行かないんですか。一緒に行きましょうよ」。

「和泉一人で行ってこいよ。ちゃんと待ってやるから」。さすがの和泉さんも、斎藤さんのこの一言でとどめを刺された感じだ。「いや、いいです。ご飯を食べに行きましょう」。「別に遠慮することないじゃ

ん。行ってこいよ」。「いえ、本当にいいですから」。これで和泉さんも完全降伏。私たちはふたたびお好み焼き屋を捜すことにした。

第49話 / 昼食

私たちが入り込んだ脇道からようやくもとの道にもどろうとする手前に一件のお好み焼き屋があった。ここも決して目立つ場所ではなかったが、これまでのいきさつからあまり期待しないで中をのぞいてみると、どうにか6人が座れるくらいの空席が見つかった。これ以上歩き回るのも面倒だし、ここで昼食をとることにした。

私たちは3人ずつふたつのテーブルに分かれて座った。私は小木曾さん・和泉さんと座り、3人でメニューをのぞき込んでいた。すると隣のテーブルから斎藤さんが声をかけてくる。「トン君、牡蠣焼きどう?。おごったげるよ」。私が前の週に牡蠣にあたっていることを知っていたいながら、まったく意地が悪い。私は苦笑して答えに代えた。

結局、私たちのテーブルの3人はみんなモダン焼きを頼むことにした。個人的にお好み焼きにそばが入っていないと何か物足りない。余談だが、広島でお好み焼きを頼むときは、そば肉玉ダブルというのが基本型だ。

テーブルにはそれぞれ鉄板がついていて、お店の人が各テーブルにやってきてお好み焼きを焼いていく。そのうち私たちのテーブルにもお店の人がやってきた。

第50話 / あこがれ

私はお好み焼き屋に行くと、お店の人がお好み焼きを焼く様子に見入ってしまう。その姿は子供のときからあきるほど見ているものなのに、今でもしげしげと見つめてしまう。その鮮やかな手さばきを何ごともないようになす姿へのあこがれは、あるいは自分の不器用さからくるものなのかもしれない。この店の人の焼き方も見事で、一通りの作業が終わった後で「ではこちらが良いというまで待っていてくだ

さい」と言われると、「ははっ、おっしゃる通りにいたします」という気分ですらなる。

店の人の合図でソースに青のり、鰹節をまぶす。ソースの焼けるにおいがいやがうえにも食欲をそそる。さっそくこてを手に取ってお好み焼きを食べる。おいしい。やはりお好み焼きはお好み焼き。広島風であろうと関西風であろうとおいしいものはおいしい。

私と小木曾さん、和泉さんは、ビールを飲み、お好み焼きを食べながら競馬談義に花を咲かせる。和泉さんは馬券を買うより、馬を持つことの方に興味があると言う。そこで自然に共同馬主クラブの方へと話題が移る。小木曾さんは「でも1/100の権利じゃなあ」と言う。すると和泉さん、「でもダービーを勝てば1/100でも130万円ですよ。やっぱりこういう夢を持たなくちゃ」。「うーん、でもなあ」

同じ競馬を楽しむといっても、人それぞれに楽しみ方はずいぶん違う。でもそれが競馬の一番おもしろいところなのかもしれない。そうするうちにお好み焼きも食べ終わり、私たちはお好み焼き屋を後にした。

第51話 / WINS

お好み焼き屋を出た私たちはWINS道頓堀へと向かう。道すがら食べたお好み焼きについての感想を語り合っていると、斎藤さん、「あっ、そうだ、ねぎ焼きを食べれば良かった」。しかし今ごろ思いついたところでどうすることができるわけでもなく、私たちはまあまあという感じでWINSへの道のりを歩き続けた。

WINSへたどりつく途中に「大たこ」というたこ焼きの屋台があった。この屋台は大阪に来る以前より話に出ていたのだが、昨日はあまりに長い行列ができていたのでこれに並ぶのは面倒だし、時間もかかるので次の機会にしようということにして通り過ぎていた。しかしこの天候ならば並んでいる人も少ないかもしれないかもしれない。そう期待していたのだが、残念ながら若干行列が短いかないという程度でしかなかった。そこで「大たこ」はあきらめてWINSに直行しようと思ったのだが、山本君が言う。「僕が並びます。みなさん先に行っていてく

ださい」。彼はどうやら馬券を買うことよりも、たこ焼きを食べることの方が気になるらしい。しかし当り馬券を抱えている深谷さんらは早く払い戻しがしたいし、さりとて山本君をこの寒空の中待たせておくのも悪かるうということで、結局、たこ焼きはここではあきらめることにした。

こんな感じでふらふらしながらも、私たちはどうにかWINS道頓堀へとたどり着いた。WINSでは小倉のメインレースが終わった後に集合する時間と場所だけ決めて、そのあいだは各人が自由に行動することにした。めいめいが思い思いの新聞を買って売場や払い戻しの方へと散らばっていった。

第52話 / 背水

私は和泉さんと一緒に新聞を買い、禁煙である最上階に行く。ところが和泉さん、ここまで来ていながら遊ぶためのお金がないという。最初のレースで外してしまうと、もう帰りの電車賃すら危なくなるとか。おのずと新聞を見ながらの検討にも熱がこもる。

一方、私はというと、新聞は出走馬の確認程度で、あとは場内テレビに写るパドックの様子をじっと見つめる。ただWINSのテレビはすべての馬を一回ずつでも見られれば良い方で、払い戻し金の発表やつまらないCMなどのためにすべての馬を見ることができないことも少なくない。だから私はふだんWINSで馬券を検討することはほとんどなく、今回のような買い方は久しぶりの機会となる。

そのためかどうかはわからないが、馬券の成績ははかばかしくない。お得意の複勝が時々当たるくらいで、肝心の勝ち馬の予想はさっぱりだ。それとは対照的に和泉さんは着実に馬券を的中させていく。びっくりするような大穴こそないものの、少ない点数で堅実に資金を増やす。崖っぷちで勝負をしているだけに私とはさすがに集中力が違う。

しかし不思議なもので、和泉さんに限らずなぜかふだんはこういう買い方ができない。今回のように堅実に資金を増やす買い方もできるのに、どうしてもオッズの高い方をマークしてしまうのは、もはや人

の本性と言うべきなのだろうか。そのことがわかっていながらも、ついに人気のない馬へと目が行ってしまうのだった。

第53話 / 収支

私と和泉さんが次のレースについての展望などを話していると、ふらりと斎藤さんがやってきた。「どう、調子は」。斎藤さんは私たちの顔を見るなり聞いてきた。「いやあ、まあまあですよ」。結構当てているはずなのに、和泉さんの答えは控え目だ。「なかなか高笑いという訳にはいきませんね」。「ふーん」。心なしか斎藤さんの和泉さんを見る目がうらやましがた。

実は斎藤さん、このころ連敗街道を突き進んでいて、とにかく馬券が当たらない状況にあつたらしい。この連敗は春の中京でごひいきのヤマニンの馬が勝つまで続く。しかしこのときはそうした状況を知る由もない。やはり勝者と敗者は WINS では共存できないのだろうか、やがて斎藤さんは私たちの前から姿を消していった。

さてそうするうちに迎えた小倉のメインレースが人気サイドでおさまったとき、私の馬券は紙屑となり、トータルの収支はマイナスに転じた。一方の和泉さんはこのレースもきちんと押さえ、見事にトータルでもプラスを計上したらしい。和泉さんには喜びというよりも安堵の表情がうかがえた。

和泉さんが払い戻しをすませるのを待って、私たちは決められた集合場所に向かった。集合場所にはあっさり全員がそろい、皆でその日の成績を話してみると、プラスで終わったのは和泉さんだけのようだ。やはり賭事はある程度のリスクを背負わなければ勝てないのかもしれない。

第54話 / intermission

WINS を出た私たちは、そのあたりをぶらぶらと歩きながら、このあとの行動について話し合った。帰りの電車は6時に難波を出るが、

それまでにまだ2時間ほど時間がある。とはいえぎりぎりに駅に行くというわけにもいかないから、なんとも中途半端な時間だ。どうしたものかなかなか妙案が出てこない。にもかかわらずあてもなく6人は難波界隈を歩いていく。

そうするうちに昨日から何度も通っている「大たこ」の前にやってきた。相変わらず長い行列ができている。まったくこの寒い中を物好きな人が多いものだ。山本君はまたたこ焼きをあきらめきれない様子だったが、年をとると空腹よりも寒さの方が身にしみる。先を急ぐ年長者に屈する形で、山本君もほかのメンバーにしたがって「大たこ」の前を通り過ぎた。

しかしこのあとの予定は依然として立たない。結局、外は寒いし、このまま歩いていてもしかたないから、適当に喫茶店にでも入って時間をつぶすことにした。そう決まるが早いか、最初に目についた喫茶店に6人が吸い寄せられていく。店の前の陳列ケースをのぞいて、大体の値段を把握して私たちは店の中に入った。このとき小木曾さんが会心の発見をしたことを私たちは知る由もなかった。が、そのことがあとでちょっとした不幸を招こうとは、さすがの小木曾さんも見通すことはできなかった。

第55話 / overture

喫茶店の中に入った私たちはもう一度メニューを開いて、各々がお目当てのものを確認し、一人一人が注文していく。斎藤さんと私がコーヒーを、山本君がアイスコーヒーをたのむ。そのあと深谷さんと和泉さんはケーキセットを注文したのだが、このとき小木曾さんが二人の方を見てふっとほくそ笑んだ。一体その笑みが何を意味するのか不思議に思うあいだに小木曾さんが注文したものは何とカレーライスだった。

「小木曾さん、カレーなんか食べるの」。斎藤さんが尋ねる。「いやあ、おなかすいてきたし、それにさっき値段を見たら、これがコーヒーと同じだったんだわ。それならカレー食べた方が得だと思って」。え、

そうだったんですか。しまったなあ。何で小木曾さん先に言ってくれないですか。和泉さんが悔しそうに言う。

さてそのうち注文したものが次々にテーブルに運ばれてくるが、小木曾さんのカレーライスだけがなかなかやってこない。しかし小木曾さんの表情には余裕すらうかがえる。この場でカレーを注文し、周囲を驚かせたこと自体が小木曾さんを満足させているのだろうか。やがてカレーライスが小木曾さんに置かれると、和泉さんがうらやましげなまなざしを向ける。それは小木曾さんの満足をいっそうふくらませたようだ。しかし事態はこのあと小木曾さんの予想していなかった方向へと進み始める。

第 56 話 / allegro

「カレーといえば、昨日はラーメンじゃなくてカレーにすれば良かったね。深谷さんがこう言うと、「え、それって何の話ですか」と和泉さんが尋ねる。そこで私たちは代わる代わる和泉さんに対して、昨日金龍ラーメンを食べたいきさつを話してきかせた。すると和泉さんが「じゃあみなさん、このあとその自由軒にカレーを食べにいきませんか」と言う。だが時間が時間だし、だれもその言葉をまともにとりあげることがしなかった。「食いたきゃ和泉一人で食べてこいよ」。斎藤さんはいつもの通りそっけない対応をとる。「これからカレーを食べるって、ここでカレーを食べてしまった僕はどうなるの」。小木曾さんも苦笑しながら答える。和泉さんも重ねてカレーを食べることを主張しなかったし、カレーの話はこれでおさまったかに思えた。

さて、そのあと二日間のできごとを振り返るなどひとしきりの雑談が終わると、私たちは喫茶店を後にした。まだ電車の時間には少し早いが、ばたばたするよりもいいだろうということで、私たちは近鉄難波駅に直行することにした。難波駅への道は昨日から何度も通っているのであるが、これが最後かと思うと多少の感慨も生じる。「ほら、そこが自由軒だよ」。深谷さんが指を差す。すると和泉さんはびたりと足を止めて言った。「みなさん、どうです。カレー食べませんか」。和泉

さんはカレーをあきらめたわけではないらしい。斎藤さんと小木曾さんが前と同じような反応を示したが、今度は和泉さんは引き下がらない。「みなさん食べましょうよ。お金は僕が出しますから」。

どうやら和泉さんは本気でカレーを食べようとしているらしい。それがわかると小木曾さんも真剣に抵抗する。「もう時間もないし、お店も込んでいるようだから、また次の機会ということにしましょ」。「いや、まだ大丈夫ですよ」。しばらく店の前でこんなやりとりがあったが、最後は6人がすぐに入れるようだったら入ろうということで妥協が成立した。和泉さんの食べ物に対する思いの前には、さすがの小木曾さんも屈するほかなかった。

それじゃあとといって深谷さんが店の中をのぞくと、6人なんとか座れそうだとのこと。意気揚々と歩く和泉さんと、仕方ないという表情の小木曾さんの対照を楽しみながら、ほかの4人も店の中に入っていった。

第 57 話 / scherzo

自由軒は狭いスペースに粗末なテーブルとイスが窮屈に並び、このあたりによくある小汚い店だ。そのくせ客はそこそこ入っている。繁盛しているのならもうすこし店をきれいにすれば良いのに。そんなことを思いながら、私たちはわずかに空いた隙間を埋めるように席に座った。

するとすぐに店のおばさんが注文を聞きにくる。といっても私たちのたのむものは最初から決まっている。問題は小木曾さんがどうするかであり、私たちの視線はおのずと小木曾さんの方へと向けられた。「みなさん、カレーを食べてください。私は別に何かたのみます」。この小木曾さんの言葉を受けて、深谷さんが「じゃあ名物カレー5つ」とおばさんに言う。

それにしてもカレーの話が出るや深谷さんの積極的な動きが目につく。そういえば自由軒の話を持ち出したのも深谷さんだったような気がする。ひょっとするとカレーを食べたかったのは、和泉さん以上に深谷さんだったのかもしれない。

深谷さんに続いて小木曾さんが言う。「それとビールの小瓶に串カツ」。すると店のおばさん、不満そうな顔で「え、カレー食べないの」と聞き返す。「いやあ、おなかいっぱいなんだわ」。じゃあなんで串カツなんぞたのむんだ、といわんばかりの表情でおばさんはもう一度言う。「本当にカレー食べないの」。「いやあほんと、もう食べられんのだわ」。こう言われておばさんもしぶしぶ引き下がる。

まったく小木曾さんの行動するところには笑いが絶えない。振り返ってみれば、あそこでカレーを食べたのはこのことあるを予想してのことではないかとさえ思える。それが狙ったものであるかどうかは別にして、小木曾さんの諧謔のセンスは持って生まれたものとしか言いようがなく、余人にはおよそまねのできるものではない。

第58話 / 批評

この自由軒の名物カレーというのは普通のカレーと違って、はじめからごはんがカレーがまぜあわさされていて、その上に生卵を落としている。テレビ等で紹介されることも少なくないから、ご存知の方も多いだろう。

余談だが自由軒では普通のカレーも売っていて、名物カレーと区別して「別カレー」と呼ぶらしい。ついでにいうと店のおばさんたちは名物カレーの注文を受けると、厨房に「インディアンカレー」と伝える。これこそ本場インドのカレーだと言いたいのだろうか。しかしインドでは決してあのようなごはんの食べ方はしないらしい。私が福岡天神のナーナクで一緒にごはんを食べたインド史の第一人者である辛島昇先生の話の聞く限りはそうである。

このあたりのネーミングのセンスをみんなで楽しんでいると、やがて件の名物カレーがやってきた。生卵のまぜかたに作法でもあるのだろうかなどと余計なことを考えていたら、隣に座っていた小木曾さんが、「一口だけちょっといいかな」と言う。「あ、どうぞ」と答えると、小木曾さんはスプーンいっぱい私のカレーをとって串カツの皿にのせる。そしてカレーをまぜているのかつぶしているのかよくわからな

い動作をしながら少しずつ食べていく。一口食べるごとに、「ふうん、こういうものか」、「まあ、ふつうのカレーだね」などと批評を加える。それを食べ終わると、今度は反対側に座っている深谷さんの方に向かって、「ちょっといいかな」と言って深谷さんのカレーを自分の皿の上に持ってくる。そしてカレーをつぶしながら口に運んでは批評していく。

こうした小木曾さんの行動を遠目にながめている店のおばさんの姿が印象的だった。はたしてどういう心境でその様子を見ていたのだろうか。それを知ってか知らずか、小木曾さんはカレー批評を続けるのだった。

第59話 / 回帰

そうこうするうちにカレーも食べ終わり、私たちは自由軒を後にした。自由軒の勘定は店に入る前に言っていたように和泉さんが負担した。さすがにこの日の競馬で唯一プラスを計上した人は太っ腹だ。店を出た頃にはちょうど良い時間になっており、私たちはそのまま駅に向かうことにした。

ところがその途中で再び和泉さんがぴたりと足を止める。おやと思っただけで振り返ると、そこは映画館の前だった。何かおもしろそうな映画でも見つけたのかと思ったのだが、よく見ると和泉さんの視線は映画館そのものではなく、そのそばの小さなショウウィンドウに向けられていた。いったいそこに何があるのだろうか。私たちもそのウィンドウをのぞきこむ。

見るとそこにはあやしげなタイトルのビデオが並んでいた。「和泉、何つまんないもの見てんだよ」。「いやあ、ちょっと。いいなとおもって」。「ん、どれどれ。ほお、これはなかなか」。斎藤さん・和泉さん・小木曾さんの3人のペースは最後まで変わらない。しばらくそこで立ち止まった後、私たちはまた駅の方に歩きだした。

するとまた和泉さんが「ちょっと待っていてください」と言い残し、そばの小さな酒屋に入っていった。今度はいったい何だという感じで

5人が顔を見合わせる。そして小木曾さんが言う。「まったく、団体行動ができんのだから」。

第60話 / 難波駅

しばらく待っているとやがて和泉さんが戻ってきた。「和泉、いったい何しに行ってたんだよ」。斎藤さんが尋ねる。「まあ、いいじゃないですか」。笑って答える和泉さん。「え、人に言えんようなものを買っていたの」とは小木曾さん。「何ですか、人に言えないようなものって。いや、ここでしか売っていないビールでもないかなと思って」。「へえ、そんなのがあるの」。「いえ、ありませんでした」。

さて、そのあと難波駅に到着した私たちが最初にしたことは、切符が使えるかどうかの確認だった。というのは、私たちが持っている切符は鶴橋から名古屋までの切符だったからだ。行き段階で名古屋からは鶴橋も難波も同じ値段だということはわかっていたが、はたして難波からすんなり乗せてもらえるかどうかを確かめておかなければならない。もし乗れないとすれば、別に鶴橋までの切符を買わなければならない。

駅員に尋ねたところ、幸い難波から乗っても問題ないとのこと。やれやれという感じで、私たちは車内で飲み食いするものを買いに向かった。駅の中をしばらく歩いた後、蓬菜で餃子に焼売、それに唐揚げなどをかう。ここで代金を払うと、計ったように最初に集めていたお金を使いきってしまった。行き当たり場当たりで行動していたにしては、見事というほかはない。なぜだかわからないが、うれしくなった。

第61話 / おみやげ

やはり会社の人に何か買って帰らないと具合が悪いだろうということで、私たちは近くの土産物屋をのぞく。しかしこういうところに並ぶ菓子はどこに行ってもかわりばえがしない。まったく同じ物が別の場所で名前を変えて売られていることも少なくない。たとえば広島

新平家物語は福岡では博多の女になり、さらに長崎では長崎物語と名乗っているらしい。ついでにいうと、以前私が幕張への出張の帰りに買ってきた伊豆の何とかという菓子も、それらによく似たものだった。

私たちがのぞいた店もおこしのたぐいのほかは、なぜ大阪名物を名乗るのかよくわからない代物ばかりだったが、そんなたいそうなものを買うこともあるまいということで、数と値段を見比べて、各グループに配るのに具合のよさそうなものを適当に選んだ。ここでメンバーの構成が、SG・OA3人、操業計画2人、管理1人と偏っているため、代金の支払いをどうするかが問題となる。同じグループの参加者がいない私の立場が不利なのは否めず、ここは余計なことを言わないで息をひそめてなりゆきを見つめることにした。幸い今回のメンバーはみんな大人なので、必要な分をまとめて買って、単純に参加者の頭数で割って負担することが決まり、私もやれやれと胸をなでおろすのであった。

会社への土産も一応買ったことだし、そろそろプラットフォームに向かうかという話が出たところで和泉さんが言う。「あ、まだ発車まで時間ありますよね。ちょっと行きたいところがあるんですけどいいですか」。「行きたいって、どこへ」。「いや、ちょっと。時間までにはちゃんと帰ってきますから、みなさん、先に行ってください」。「そりゃかまわないけど、遅れても置いてくからな」。「大丈夫です。それじゃあ」と言うが早いか、和泉さんは雑踏の中に姿を消していった。その後ろ姿を見ながら小木曾さんがつぶやく。「まあ、ほんっと彼は団体行動がだめだな」。

第62話 / 改札

和泉さんを除く5人はプラットフォームへと向かう。ところが先頭に行く斎藤さんが自動改札機に切符を差し込むや、おなじみの警報が鳴り始めた。あの警報音は日常的に耳にするもので、ふだん駅の中で聞こえてきたとしても気にすることはほとんどない。しかしそれは他人事であるからであって、いざ自分たちが通りすぎようとする改札機が鳴り始めると、非常に追いつめられた気持ちになるようだ。そのこ

とは、私たちが切符を確認するよりも前に周囲を見回してしまった行動にも現れていた。

このとき改札機が警報を鳴らしたのは、切符の始発駅が気に入らなかつたためらしい。私たちが持っている切符が鶴橋からになっていることは前に言及した通りである。人間がチェックすれば行き先を見て問題なしと判断するところだが、機械の方は文字どおり機械的な判断しかできないわけだ。駅員のいるはしこの改札で切符を見せるとすんなりと通してくれた。

そのあと私たちは売店で思い思いの飲み物や雑誌などを買い、プラットフォームに降りた。プラットフォームは片面に名古屋への特急が発着し、もう一面に通常の通勤電車が発着する。当然のことながら発着の頻度はまるで違い、こちら側には一向に電車が入ってこないのに対して、反対側にはひっきりなしに電車が到着しては大勢の人を飲み込んでいく。

やってこないのは名古屋への電車だけではない。やはりというべきか、和泉さんもなかなか姿を見せない。「和泉君はいつもこうなんだから。このあいだのマラソンのときもそうだったし。彼はもうあてにせんどこ」「来なかったらほっときゃいいじゃん」。この手の会話もこれで聞きおさめだろうか。やがて和泉さんが私たちの前に姿を現した。

第 63 話 / 餃子

「和泉、どこ行ってたんだよ」。「まあいいじゃないですか」。いつものような会話が展開されるのかと思っていると、名古屋行きの電車が入ってきた。そこで私たちはすぐに電車に乗り込む。今度は行きと違って6人の席をまとめて取れていたもので、シートの向きを変えて6人が向い合わせですわる。小木曾さんなどは出発前に、「こういうのってなんかおばさんみたいでいやだな」とか言っていたのだが、やはり最後はこの形に落ち着くようだ。

やがて電車が動き出す。私たちはさっそく買って来た食べ物を出したのだが、餃子の強いにおいが鼻をつく。パッケージに入っていた時

点ですでに気にはなっていたのだが、開けると気になるどころではない。思わず周囲の反応を確認してしまったほどである。もっとも一度広がってしまったにおいをいまさらどうできるわけでもなく、私たちは開き直って餃子を食べはじめた。

私も買って来たビールを開けて餃子を食べる。するとふたたびからだにかゆみを覚えはじめた。いままでの症状から考えてアルコールが良くないというのはおおよそ見当がつきそうなものだが、まったく懲りないというかやっぱり飲んでしまうのだ。どうもこういう性格だけは死ぬまで直りそうにない。結局、これから名古屋につくまでからだをかきつづけるはめになる。

食べるものを食べ、飲むものを飲んでしまった私たちに、心地よい眠気が訪れた。私たちはそれに誘われるままに眠りに入る。いよいよツアーも終わりに近づいているようだ。

第 64 話 / 解散

電車で揺られてうとうとしていると、あっという間に名古屋についてしまった感じがする。しかし実際には雪のせいで名古屋到着が少し遅れたらしい。そのことを告げるアナウンスを意外と受け止めながら、私たちは電車を降りた。

この2日間の疲れはやはり相当に大きかったのだろう。家路を急ぐ小木曾さんと別れ、5人はまっすぐ名鉄の乗り場に向かった。次の特急の発車までおよそ20分。深谷さんはちょうど頃合いだなという感じで切符売り場の方に歩き出した。斎藤さんと和泉さんがそれにつづいたが、山本君は「自分はこのあとの急行で帰ります」と言い残して、プラットフォームの方に走り出した。そのすばやさは私たちが彼に声をかけることもできなかったほどである。

実は次の特急は内海行きだったため、山本君にとってはその前の河和行きの急行の方が具合が良かった、ということがわかったのは、彼の行動への驚きが少しばかりおさまってからである。かといってとく

に気にする風でもなく、私たちはなにごともしなかったように座席指定券を購入した。

プラットフォームに降りると、深谷さんが「ちょっとここで待って」と言って姿を消した。残された3人は近くのベンチに腰かけて、2日間のできごとをぼつりぼつりと振り返る。そのゆっくりとした会話のペースは、たまった疲れを癒そうとしているかのようであった。

第65話 / あきらめ

しばらくして深谷さんが戻ってきた。「いやあ、あっさり断られてしまった。こう苦笑いしながら私たちに言う。「武豊駅まで迎えに来てくれて言ったんだけど、こんな雪の中を運転したくないだって。こんな雪の日だから迎えに来てほしいのになあ。」「うーん、それは残念。」「こんな日じゃタクシーもないだろうし、まああきらめて歩いて帰りますか。」「やがて特急がやってきて、私たちは電車に乗り込んだ。

この時間の特急は、通常の停車駅のほかに、南加木屋や巽ヶ丘、南成岩などにも停車する。「これじゃあ急行と変わらん。特急料金も少し割り引いてほしいな」とは深谷さんの弁。なるほど感覚的にも、太田川からかなり細切れに止まる感じがする。結局、特急乗車に必要なのが「特急券」ではなく、「座席指定券」であるというのがミソなのだろう。要するにそれはスピードへの対価ではないということだ。

「ああ、やっぱりだめか。」「半田を過ぎた頃に斎藤さんが言う。知多半島ならあるいは雪の積もり具合も多少ましではないかと期待していたのだが、今回の雪ばかりはそう都合良くいかないようだ。「しょうがない。雪の中を歩きましょうか。」「斎藤さんも覚悟を決めたようだ。そうするうちに武豊に到着。私たちは電車を降りた。

第66話 / 雪中行

武豊駅前にはやはり車の姿は見えなかった。私たち4人はしかたないという感じでとぼとぼと歩き始めた。雪の降り積った道はかなりす

べりやすくなっており、平らなところを歩くことすらおっかない。まして私たちは坂道を登っていかなければ寮や社宅に帰ることができない。4人は一歩一歩踏みしめながら恐る恐る歩いていく。

悪いことは決して単独ではやってこない。私たちを苦しめたのは雪ばかりではなかった。もともとこのあたりは風の強い場所だが、この日の風は一段と強い。50kgにも満たない私などは簡単に吹き飛ばされそう。それでも農業試験場のあたりまで登りきると、衣浦寮を照らすオレンジ色の明りが見えてきて、やっと帰ってきたという実感がこみ上げてきた。

こんどはゆっくりと坂道を下り、衣浦寮をめざして歩いていく。相変わらず風は強く、足元はすべりやすい。私たちが登るとき以上に慎重な足取りで坂道を下っていった。「でもこのタイミングで雪がこんなに降るなんてすごい偶然だね。」「けど逆に言えば、めったにできない体験ができたってことですよ。」「そうそう、この2日間って、すごい密度濃かったと思う。寮を目前にして、私たちは2日間のできごとを振り返る。この2日間の体験をそのまま終わらせるのは惜しいという共通の思いがそうさせたのかもしれない。

やがて衣浦寮の前に到着し、深谷さんは社宅へ、斎藤さんと和泉さんは衣浦寮へと分かれていく。そして残された私も知多寮へと歩きはじめた。

最終話 / やがて来る春

一人になった私は社宅の脇の坂道をとぼとぼと登っていく。この道に積もった雪は相当踏み固められていて、これまで以上に歩きにくい。私は知多寮に帰るのにこの道を選んでしまったことを後悔した。しかしいまさら引き返すのは面倒だし、こんな坂道を下るのは登る以上におっかない。私は気をとりなおして再び坂道を登りはじめた。

歩いていくうちに、私の頭の中に2日間のできごとがよみがえってくる。6人のやりとりを思い出すたびに笑いがこみ上げてくるのをこ

らえる。そうしてふと積もった雪に目を転じたとき、思わず口をついて出た歌があった。

いつか雪が降り始めて
紛れそうな言葉
いつも君は笑いながら
どんなことも許すから
やさしすぎて 寂しすぎる
いつか雪が降り積もって
今日も町を包む
どんな過ちも静かに
白く埋めてしまうけど
僕が投げた言葉だけは
どうぞまだ消さないで

この2日間のできごと、やがては記憶の底に埋もれてしまうのだろうか。今度の雪が町中を白く覆ってしまったように。雪はやがて溶けてしまうが、埋もれた記憶は簡単には戻らない。またできごとは思い出せたとしても、はたして体験したときの感動までもがよみがえるだろうか。楽しい思い出を振り返りながらも一抹の寂しさを感じつつ、歌の続きを口ずさむ。

やがて来る春が辛すぎたりしないように
雪溶けの前に君に謝りたい だから
降りそそぐ春が君と僕を包むように
雪溶けの前にきっと会いにゆくよ だから

このとき私ははたと思った。よし、この2日間のできごとを記録に残そう、と。雪に包まれたままの新鮮な感動を自分なりに表現しよう。埋もれた記憶を取り戻そうとしたとき落胆することのないように。今の素直な気持ちを文字にしよう。やがて来る春にも今と同じ感動が得られるように。

そういう考えが浮かぶと、私はにわかに速足になった。自分の今の思いを一刻も早く形にしたいという思いが私の頭の中を支配した。寮に着いて部屋に戻った私は荷物を放り出すと、さっそくパソコンの電源を入れてエディタを立ち上げた。最初のタイトルを打ち込むのにためらいはなかった。

タイトルを打ち込むと私は少し落ち着いた。そしてゆっくりと2日前からのことを振り返り始めた。この物語はここに始まり、ここで幕を閉じる。